



LASSE VIRÉN

ラッセ・ビレン

For the love of running

ランニングへの愛

by Arold Jansen/photography Sandor Lubbe

Even today, the Olympic victories of Finnish athlete Lasse Arturri Virén remain undisputed milestones in professional long-distance running. We looked up Onitsuka Tiger's living legend and joined him on a trip down memory lane.

長距離走のプロフェッショナルとしてフィンランドのラッセ・A・ビレンがオリンピックで勝ち取った勝利は、現在でも記憶に残る事件であることは疑いがない。私たちはオニツカタイガーの生きた伝説を見つめ、彼とともに記憶の旅へと飛び立つ。

← BET
WIL



Made of Japan - ナイト・オブ・ジャパン

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

races in nearby villages, and in 1967, became the Finnish 3k champion in his age group.

Virén then joined the military, serving in a Finnish military sports section. While the post allowed him to continue running and training, his athletic performance deteriorated by the end of that year. So Virén contacted Finnish athletic trainer Rolf Haikkola and begged him for help. Haikkola agreed to train Virén in the spirit of Arthur Lydiard (1917-2004), a renowned New Zealand athletics coach who had earlier been invited by the Finnish Athletics Association to help structure the coaching program.

The training paid off. In 1968 and 1969, Virén broke the junior Scandinavian athletic records for the 3k and 5k; he was the first Finnish junior to stay under the magical 15-minute marker (14.59,4). Virén held that record, along with a two mile record set on August 14, 1972, for more than 40 years.

While he did not qualify for the 1969 European Championships in Athens, he did experience the Olympic atmosphere in its historical context, watching the Games from the grandstand as a tourist. A travel agency had sponsored his trip to Athens.

Back in Myrskylä, Virén now takes us to his medals room, a small space filled with glass cabinets. He is looking for the first prize he won during the 1969 Kaleva Games but it is missing. “It may be my most important win, the prize is dear to me,” says Virén. He explains that the Scandinavian athletic meet is filled with the same rivalry as the CCCP-USA ice hockey games of the Cold War, especially between neighboring countries Finland and Sweden.

Virén’s Olympic medals are kept in a paper box, wrapped in the original paper they arrived in. He is a cerebral man who relishes his anecdotes. They come alive in his eyes when he talks. The missing spoon is not just another prize. It is a story, hidden somewhere between his medals and trophies, photos, diplomas and other

のレースだ。

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

初めての勝利

1966年

1949年に4人兄弟の末っ子として生まれたビレンは、オリンピックに向けてトレーニングを始めた頃は、まだムルスキュラ以外では無名だった。フィンランドの名もない町から来た一少年だったのだ。しかし近隣の村で800mや1000mのレースに彼が勝ち始めると、状況は変わり始めた。1967年には3kmのレースで、彼は同年代のグループでチャンピオンになった。

その後彼はフィンランド軍に入隊し、スポーツ部門に従事した。そのポストは彼にランニングと訓練の継続を許可したにもかかわらず、その年の終わりには彼の競技成績は落ちてしまった。彼はフィンランド人の優秀なトレーナーであるRolf Haikkolaにコンタクトを取り、助けを願った。Haikkolaは、アーサー・リディアード(1917-2004)の精神にもとづきビレンを指導することに賛成した。リディアードは有名なニュージーランド人のコーチで、コーチングプログラムを構築するために、かつてフィンランド陸上協会に招待されていた。

トレーニングが実を結び、1968年、1969年には3kmと5kmにおいて、スカンジナビア記録を塗り替えた。彼は、15分以下(14.59,4)という驚異的な記録を作った、最初のフィンランド人青年となった。

彼のこの2つ記録は、1972年の8月15日以来40年以上経った今も破られることはない。1969年アテネで行われたヨーロッパ選手権に参加資格をえられず、彼は旅行者としてスタンド席で観戦しながら、歴史的なオリンピックのムードに浸っていた。旅行会社が彼のアテネ旅行のスポンサーとなった。

話をムルスキュラに戻そう。ビレンは私たちをメダルの部屋へと連れて行ってくれた。そこは、ガラスのキャビネットでうめつくされた小さな部屋だった。彼は1969年Kalevaの試合で取った1位のメダルを探したが、見つからなかった。「私の1番大切な1勝でした。正に挑戦でした。」スカンジナビア競技会は、旧ソ連対アメリカのアイスホッケーの試合のような冷戦状態にあった。フィンランドとスウェーデンの関係は特にそうだった、と彼は言う。

オリンピックメダルは、届いたときと同じ組みで、紙の箱に保存されている。彼は自分の逸話を楽しむ知性を持っている。それは、彼が話し出すと瞳にいきいきと現れる。この無くなったメダルは他の賞とは変えられない。なぜなら、メダルやトロフィー、写真や賞状、その他、彼の輝かしいキャリアを通して忘れたい事柄のなかに、隠されたストーリーがあるのだ。

オリンピックメダルは、届いたときと同じ組みで、紙の箱に保存されている。彼は自分の逸話を楽しむ知性を持っている。それは、彼が話し出すと瞳にいきいきと現れる。この無くなったメダルは他の賞とは変えられない。なぜなら、メダルやトロフィー、写真や賞状、その他、彼の輝かしいキャリアを通して忘れたい事柄のなかに、隠されたストーリーがあるのだ。

「転ぶ練習は出来ないから

ビレンの故郷、ムルスキュラは、ヘルシンキよりおよそ80km北東に位置する。緑におおわれた丘をドライブしながら、彼がここでトレーニングしていた時代に思いをはせる。10代の頃にこの土地の残した幾千の足跡、その一步一步が、1972年ミュンヘンおよび1976年モントリオールの2大会における5km、10kmマラソンの勝者として、彼を導いていったのだ。

毎朝のランニング、温かい息は凝縮し小さな雲となって彼の口からリズムカルに吐き出される。森の大地を踏みしめる足は、スタックアートのリズムを刻む。iPodもソニーのウォークマンも持たない、決意に満ちた若きフィンランド人にとって、両脇にある木々だけが静かなる観客だった。

少年の頃、故郷で彼が始めて練習した、公共の陸上トラックの近くに、威厳に満ちた彼の銅像がある。ビレンの成功はムルスキュラにとっても最高の幸せであった。ビレンは彼らにとって生きたアイコンなのである。ここ、村の中心部で、彼はランニングを愛するようになった。「私は一等賞をとりはじめました。レースは次第に大きくなり、地域全体へと拡大していったのです」。

若き日のビレンは、ランニングを通して、同世代の少年少女と知り合っていた。当時、それ以外にムルスキュラの向こうにある世界を発見する方法は、文字通り皆無だった。アスファルトの道や車は、彼が育った農業地帯にはほとんど無かった。

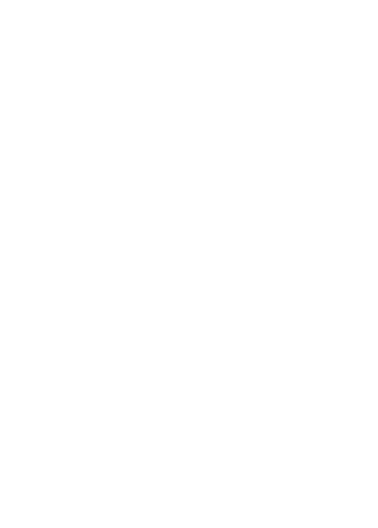
彼のオニツカタイガーMONTREALの靴跡は、KartanomäkiやPorlammi, Skomarböle近くの森から消えることは無かった。それは1980年モスクワ大会の後、プロランナーのキャリアを終えてからも変わらなかった。「空飛ぶフィンランド人」は、7月に60歳の誕生日を迎え、故郷の平和と静けさの中に戻った。松や樺の間に隠れたオアシスがあり、小さいがはっとするほど美しい湖に面している。「私はここで人生を送ることにしました」と、ビレンは言う。

彼は迷うことなく戻ることに決めた。家は頑丈な岩造りのバンガローで、オリンピックでの勝利の記念として地域から贈られた典型的なフィンランド式サウナが設置され、秘密のピアセラー、孫が来たときのための木製の小さな人形の家もある。小さいがよく吼える犬のユリに守られた、そこは静かな王国なのである。

写真家のSandor Lubbeとともに彼の家を訪れた時、彼は道路にとめた大きなトラックの中に座っていた。それは1928年に祖父が作った運送会社のものだった。

スポーツマンらしい短いグレーの髪に無精髭を生やし、モダンなメガネにASICSの黄色いポロシャツ。オリンピック当時より数キ口は太ったように見える彼が出迎え、リビングルームのダイニングテーブルのところまで案内してくれる。

ASICSの靴がそこら中に散らばり、食器洗い場の外にある小さなキャビネットはスニーカーで溢れている。毎年行われるLassen Hölkkäで勝つため、密かにトレーニングしているかのようだ。「ラッセの走り」と訳されるこのイベントは、ビレンのオリンピックでの勝利を記念して、ムルスキュラの地域が主催する20kmと10km



pine trees and birches facing a small, but breathtaking lake. “I can lead my own life here”, says Virén.

And no wonder he has chosen to return. Home is a sturdy stone bungalow furnished with a traditional Finnish sauna gifted by the community after his Olympic wins. There is also a secret beer cellar and a little wooden doll house for his visiting grandchildren. It’s a kingdom of silence viciously guarded by Juri, a little dog with a loud bark.

When photographer Sandor Lubbe and I arrive at his home, Virén is sitting in a giant truck parked on his driveway. It is a relic from another life - when he ran the transport company founded by his grandfather in 1928. Virén still takes care of that company.

Sporting short gray hair, stubble, a modern pair of glasses and a yellow ASICS polo - and at first glance, only a few pounds heavier than in his Olympic prime - Virén welcomes us into his home, leading us through the hallway to a dining table in the living room.

ASICS shoes are scattered everywhere. A small cabinet outside the scullery is packed with trainers, as though Virén is secretly training for another victory in the annual *Lassen Hölkkä*. Translated as ‘Lasse’s Run’ and hosted by the Myrskylä community, it is a 20k and 10k race created in tribute to Virén’s Olympic wins.

“*The race in the 1969 Kaleva Games may be my most important win.*”

First victories
1966

Born in 1949 as the youngest of four brothers, Virén was unknown outside Myrskylä when he began training for the Olympics. But that was about to change. Virén won 800 and 1000-meter

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

Driving through the verdant hills near Virén’s hometown of Myrskylä, about 50 miles northeast of Helsinki, I cast my mind back to the time he trained here. As a teen, Virén must have left thousands of footprints in this very soil, every step an achievement that brought him closer to winning the 5k and 10k races in Munich in 1972, and again in Montreal in 1976.

During every early morning run, small clouds of warm breath would rhythmically condense outside his mouth, accompanied by the staccato drum of his feet landing on the forest ground. No iPod, not even a classic Sony Walkman as a companion. Just a determined young Finn with the trees alongside as a silent audience.

As we pass the honorary statue of Virén in his hometown, near the communal athletic track he first trained on as a boy, I realize that Virén’s success was Myrskylä’s finest hour too. In some ways, Virén remains their living icon. It was here, in the heart of the village center, where Virén began his love affair with running. “I started to finish first. The races got bigger, became regional,” he recalls.

Through running, the young Virén connected with other boys and girls his age. Back then, there was literally no other way to discover the world beyond Myrskylä. Asphalt roads and cars were not common in the agricultural region where he grew up.

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

Bedfordに追いついた。ゴールの2周前、Haroが集団を引っばっていた。彼は先頭に近づき、最終周あたりでPuttemansと競り合った後、彼を抜いて、世界新記録27.38,4.を打ち立てたのだ。

レース後、ビレンはフィンランド国旗を振っている4人の長髪のフィンランド人に囲まれた。「空飛ぶフィンランド人」が陸上競技に戻ってきたのだ。数日後、彼は2度目のオリンピック最終レース、5kmに臨んだ。今回は、本命のSteve Prefontaine, Gammoudi, Puttemans, イギリスのIan Stewartを破った。彼がフィニッシュラインをまたいだとき、ムルスキュラの声援は耳をつんざくばかりだったとだろう。人々はみなランジスタラジオやテレビの周りに集まってレースを見守っていた。

レース後、ビレンはフィンランド国旗を振っている4人の長髪のフィンランド人に囲まれた。「空飛ぶフィンランド人」が陸上競技に戻ってきたのだ。数日後、彼は2度目のオリンピック最終レース、5kmに臨んだ。今回は、本命のSteve Prefontaine, Gammoudi, Puttemans, イギリスのIan Stewartを破った。彼がフィニッシュラインをまたいだとき、ムルスキュラの声援は耳をつんざくばかりだったとだろう。人々はみなランジスタラジオやテレビの周りに集まってレースを見守っていた。

レース後、ビレンはフィンランド国旗を振っている4人の長髪のフィンランド人に囲まれた。「空飛ぶフィンランド人」が陸上競技に戻ってきたのだ。数日後、彼は2度目のオリンピック最終レース、5kmに臨んだ。今回は、本命のSteve Prefontaine, Gammoudi, Puttemans, イギリスのIan Stewartを破った。彼がフィニッシュラインをまたいだとき、ムルスキュラの声援は耳をつんざくばかりだったとだろう。人々はみなランジスタラジオやテレビの周りに集まってレースを見守っていた。

「20年後も走っていきなちゃんらないだろうね」
「本当は足が痛かったです」

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

1969年Kaleva大会での勝利が、一番大切な一勝でした。

The Montreal double-‘double’
ラッセ・ビレンはフィンランド代表選手としてミュンヘン入りし、オリンピックの王者として2つの金メダルを故郷に持ち帰った。彼は、ムルスキュラの家を取り巻く木々の中でトレーニングを続けながら、警察官として働いていた頃のことを語った。今こそ、ランニング人生が彼にもたらした成果を享受する時なのである。「オリンピック勝者になると、大きな競技に出場しやすくなかった。レースが始まってからは順位は変わった。私は賞金を稼いできました。でもきみがこれまで稼いだ金と比べると、いくらでもないんですよ。彼はオチのところでポーズを取って微笑んだ。「20年後も走っていきなちゃんらないだろうね。」

1972年から1973年にかけて冬、ビレンは足の後ろに痛みを感じ始めた。その怪我は数年間彼を苦しめ続けた。彼の世界陸上大会からの沈黙は、1973年のヨーロッパアンカップの決勝戦、エジンバラでの5km最終レースまで続いた。結果は5位だった。

1974年、ローマで行われたヨーロッパチャンピオン大会において、彼はBedford、ドイツのManfred Kuschmannに続き3位であった。「タイガーシューズで臨んだ初めての大きなレースでした」と、彼は言う。

1975年初頭、ビレンは、筋肉の伸縮を阻んでいる靭帯を除去するために外科手術を受けた。そのため、オリンピックへの時間調整には緊迫感が常に走ってい





beating him in a new world record time: 27.38.4.

After the race, Virén was joined by four long-haired Finns waving a Finnish flag: The *Flying Finns* were back on track. Days later, Virén ran his second Olympic final - the 5k. This time, he beat favorite Steve Prefontaine of the United States, Gammoudi, Puttemans and Britain's Ian Stewart. When Virén crossed the finish line, the cheering in Myrskylä would have been deafening. People had been following the race on their transistor radios or in groups around television sets.

"My feet were hurting. That is the truth."

The Montreal double-'double'

Lasse Virén went to Munich as a Finnish athlete and came home as King of the Olympic tartan, bringing back two gold medals. He resumed working as a policeman in Myrskylä while prolonging his training in the woods surrounding his home. Now was the time to enjoy some of the achievements his life of running had brought him. "Being an Olympic winner, it was easier to enter the larger competitions," says Virén. "I did earn starting fees, but if you compare the sums of money you would earn then and now, it was nothing." Virén smiles then pauses before his punch line: "I should have run 20 years later."

In the winter of 1972-1973, Virén started to experience pain at the back of his legs. It was an injury that would trouble him for the next several years. His retreat from the international athletic arena lasted until the 1973 European Cup final, the 5k in Edinburgh. He finished fifth.

In 1974, Virén took third place at the 1974 European Championships in Rome, trailing Bedford and Manfred Kuschmann of Germany. "My first big

race on Tiger shoes," he says.

Then, in the beginning of 1975, Virén underwent surgery to remove the tight ligaments that prevented his muscles from stretching. It put his Olympic timetable under high pressure. From his operation until the opening of the 1976 Montreal Olympic Games, Virén had only 18 months to recover and get back into shape. Wanting to defend his two Olympic titles, he trained and trained. Then he showed the world his unmatched stamina.

July 26th, 1976 - the 10th day of the 21st Olympic Games and four years after Virén's golden double in Munich, Virén was one of the favorites to win. No longer was he the dark horse from Finland.

He adapted his strategy accordingly. Virén believed that Portuguese Carlos Lopes was going to lead and keep up the pace until he crossed the finish first. "The plan there was to stay behind him for 9000 meters and after that to try and quickly move up the pace," recalls Virén. "If I could keep up with Lopes until the last lap, I could make my move 600 meters before the finish line. That is what I did." At that moment, Virén then turned his head as though inspecting the physical condition of British runner David Foster, who was in third position. Then he accelerated, easily overtaking Lopes. Virén won the race by about 20 meters. He could have run even faster, but chose not to. He ran just hard enough to win the 10k race, knowing he had a 5k and the Olympic marathon coming up. "The time was 27.40, the world record was 27.38. So if I did not hold back a bit I may have run an even faster time. Just maybe," says Virén.

After finishing the 10k, Virén raised his MONTREAL 76s up into the air. The moment, captured by sports photographers, remains one of the most defining images of his career. Commentators believed it was his way

た。その外科手術から1976年のモントリオールオリンピックまで、回復し体調を整えるのに、わずか18ヶ月しかなかった。2つのオリンピック記録を守りたかった。ビレンは訓練に訓練を重ね、無敵のスタミナを手に入れた。

1976年6月26日。オリンピック競技21日間の10日目、ミュンヘンで2つの金メダルを獲得してから4年後。10km最終レースの夜はしっかりと湿っていた。彼はすでにフィンランドのダークホースではなく、勝つことを期待される本命の1人だった。彼は次のような戦略を練った。

ビレンは、自分が1位を取るまで、ポルトガルのCarlos Lopesがリードし、ペースを作るだろうと考えた。「9000mまでは彼の後ろに付けて、それから素早くペースを上げようと思っていたんです」。ビレンは振り返る。「最終周までLopesについて行くことができれば、フィニッシュラインの600m手前から動き出せるだろうと。それで、実際にそうしたんです」。その時、彼は3位を走っていたイギリスのDavid Fosterのコンディションを確認するために振り向き、速度を上げて容易にLopesに追い着き、20m以上の差をあけてゴールした。もっと速く走ることも出来たが、そうしなかった。10kmレースに勝つために十分ハードな走りをしたし、5kmレースとマラソンがあとに控えていたからだ。「記録は27.40、で世界記録は27.38.でした。もし、もう少し頑張ったら、もっといいタイムが出せたかもしれない。もしもの話だけどね」と、ビレンは言う。

この象徴的な瞬間の背景を、彼が説明してくれたので、この出来事が一層明らかにになった。また、このことは、全世界が見守る中で自分のスポンサーを支持した、バイオニアとしての彼の姿も現れている。

5kmレースに向けて、ビレンとHaikkolaは異なる戦略を持っていた。「3kmでのタイムが遅かったら、速度を上げてグループを引っぱり先頭に立つ必要があります」。本命のDick QuaxやRod Dixon、FosterやHildebrandがコンスタントにポジションを変え、スタートしてからビレンはずっと内側のレーンを守り続けて動かなかった。ビレンは、いつもそうしているように先頭に位置し、

10kmレースを終えて、彼はMONTREAL 76を空高く掲げた。その瞬間をスポーツ写真家が捉え、彼のキャリア

で最も素晴らしい瞬間のひとつが残された。解説者達は、それは彼のオニツカタイガーへの感謝の表現だと感じた。まさにそうだった。「10kmの激走の後、ヒールを少し高くする必要を感じて、オニツカの靴職人に依頼して、靴を直してもらったんです。数ミリ削ってもらいました」。ビレンは振り返る。「アキレス腱を守るための改造でした。この最初の激走以降は、彼らは私の靴をチェックしていません」。

10kmレース勝利後に靴を調整してもらったことが、オリンピック規則に違反するとして、ビレンは国際オリンピック協会より公式注意を受けた。そのため

5km最終レースの夜、彼は協会に、みずぶくれが出来ていたことが原因で靴を削ったことを報告した。「私の特注のスパイクはとても硬くて、本当は足が痛かったんです。もしレースが始まる前にこうなると分かっていたら、「靴を中空に上げるけど、いくらくれる？」と言えば良かったな」と、いたざらっぽく笑った。

この象徴的な瞬間の背景を、彼が説明してくれたので、この出来事が一層明らかにになった。また、このことは、全世界が見守る中で自分のスポンサーを支持した、バイオニアとしての彼の姿も現れている。

5kmレースに向けて、ビレンとHaikkolaは異なる戦略を持っていた。「3kmでのタイムが遅かったら、速度を上げてグループを引っぱり先頭に立つ必要があります」。本命のDick QuaxやRod Dixon、FosterやHildebrandがコンスタントにポジションを変え、スタートしてからビレンはずっと内側のレーンを守り続けて動かなかった。ビレンは、いつもそうしているように先頭に位置し、

10kmレースを終えて、彼はMONTREAL 76を空高く掲げた。その瞬間をスポーツ写真家が捉え、彼のキャリア



of saying thank you to Onitsuka Tiger, and in a way, it was. "After the first 10k heat, I felt that my heels should be a bit higher. So a shoe maker of Onitsuka Tiger altered the shoe and took some millimeters away," recalls Virén. "The adaptation he made was to protect my Achilles heel. They never checked my shoes after the first heat."

In adjusting his shoes after his 10k win, Virén received an official warning by the International Olympic Committee's technical board, who accused him of contravening Olympic rules. So on the eve of the 5k final, he explained his actions to the board, telling them that he had been suffering from blisters, which is why he removed his shoes. "The spikes that were specially made for me were too tight. My feet were hurting. That is the truth," says Virén. "If I knew I was going to do this before the race started, I would have said, 'I can hold the shoe up in the air, but it all depends upon how much you pay,'" he adds, cheekily.

Virén's explanation behind that iconic moment demystifies the event. But it also shows him as a pioneer for supporting his sponsor: the whole world was watching.

For the 5k race, Virén and Haikkola hatched a different plan. "If the 3k time was too slow, I had to speed up and lead the group, showing the others who's the boss," says Virén.

After the start, Virén took the inner lane and never left it, while favorites like Dick Quax, Rod Dixon, Foster and Hildebrand seemed to constantly switch positions. Virén stayed ahead, doing what he always did, and won the race. The effort was dubbed the double-'double.'

It was an Olympic tour de force shared only by Hannes Kolehmainen, the first of the Flying Finns, Czech Emil Zatopek, and Russian Vladimir Kuts. Virén is the only one to have done it twice in succession.

By this point, there was little time left for Virén to recover before his final race - the marathon. Only 18 hours after winning the 5k final, Virén had to run the marathon's 42 kilometers and 195 meters. Yet, he astonished the world, running along with the best marathon athletes until the 37k mark. After that, his legs felt empty and he lost ground. Virén finished fifth in 2.13.11. If you include his training hours, the two heats and the two Olympic finals, it was an epic result. Virén had experienced the famous words of Emil Zatopek: "We are different, in essence, from other men. If you want to win something, run 100 meters. If you want to experience something, run a marathon."

"It was interesting to play an active role in increasing the performance of their running shoes."

Lasse Virén Tiger

The relationship between Virén and Onitsuka Tiger goes a long way back. It was in the spring of 1973 when Virén first came into contact with the Japanese brand. He was competing in a 5k in Kobe and Hiroshima "or maybe in Tokyo, I am not sure." Virén did not have a written contract with Adidas and the Finnish sports brand Karhu did not want to sponsor him because they already had similar runners. But Virén was inspired by a young, forward-looking company called Onitsuka Tiger, led by the charismatic Kihachiro Onitsuka.

Virén met Onitsuka for the first time after his race. "I was interested in trying something new. And I didn't have any reason to stay with Adidas," he says.

Virén opted for Onitsuka Tiger's normal running shoes, then later, the spikes. "The problem with Onitsuka Tiger was that they only produced sports shoes, not clothes. Besides

レースに勝った。効果は2倍の2乗であった。それは初代空飛ぶフィンランド人であるHannes Kolehmainen、チェコのEmil Zatopek、ロシアのRussian Vladimir Kutsとだけ共有できる、オリンピックにおける聖戦であった。彼だけが2度続けて成功したので。

この時点で、最後のマラソンレースまでに回復する時間はあまり残されていなかった。5km最終レースに勝利してから18時間後には、彼は42.185kmのフルマラソンに出場しなくてはならなかった。しかし彼はまた世界を驚かせた。37km地点まで先頭集団とともに走ったのだ。その後、足が脱力してフラつき、2.13.11のタイムで彼は5位に終わった。それでも、トレーニングの時間と、2つのレース、2つのオリンピック決勝戦を含めると、これは記録的な結果だった。彼はEmil Zatopekの有名な言葉を経験した。「私たちは素養においてそれぞれ異なる。もし勝ちたいなら100mを、経験を重視するならマラソンを走ってみるからだ」。

Virén met Onitsuka for the first time after his race. "I was interested in trying something new. And I didn't have any reason to stay with Adidas," he says.

Virén opted for Onitsuka Tiger's normal running shoes, then later, the spikes. "The problem with Onitsuka Tiger was that they only produced sports shoes, not clothes. Besides

Lasse Virén Tiger

Virén met Onitsuka for the first time after his race. "I was interested in trying something new. And I didn't have any reason to stay with Adidas," he says.

Virén opted for Onitsuka Tiger's normal running shoes, then later, the spikes. "The problem with Onitsuka Tiger was that they only produced sports shoes, not clothes. Besides

広島大会での5kmレースに参加していた。「もしかしたら、東京でだったかもしれない、ちょっとはつきりしないんだが」。彼はAdidasとは書面での契約を結んでおらず、またフィンランドのスポーツブランドKarhuには、既に同じような走者を抱えているという理由で、サポートを断わられていた。彼は、鬼塚喜八郎というリーダーの率いる、若く先見の明のあるオニツカタイガーという企業にインスパイアされていた。彼はレースの後、初めて鬼塚に会った。「私は新しいことに挑戦してみたかったです。Adidasに留まる理由もありませんでした」と、彼は言う。

ビレンはオニツカタイガーの普通のランニングシューズを選んだ。その後、スパイクを履くようになった。「唯一の問題は、オニツカタイガーは、ウェアではなく、スポーツシューズしか作っていなかったことでした。また、日本から船便で届く靴は、私には合わなかったんです」と、ビレンは言う。「それが理由で、1974年の時点では、オニツカタイガーと私の関係は、外部にはまだ明らかになっていなかったのです」。

その年の終わりから全てが変わりだした。1974年、ビレンとコーチのRolf Haikkolaはオニツカタイガーをフィンランドに輸入する会社を立ち上げた。"Lasse Virén Tiger"である。残念ながらフィンランドのスポーツリテラーは、毎年春の新作としてビレンが個人的にPRをしていく事を望んだ。その場合、車で国中を何千キロも駆け回らねばならなくなる。「80年代初め、ビレンはその会社を売却した。「あれは失敗でしたね」と、彼は笑った。

1974年ローマで行われたのヨーロッパ

that, the shoes shipped from Japan did not fit me,” says Virén. “Those were the reasons why that for some time in 1974, my relationship with Onitsuka Tiger wasn’t clear to the outside world yet.”

All that changed later that year. In 1974, Virén and coach Rolf Haikkola started their own Finnish import company for Onitsuka Tiger: Lasse Virén Tiger. Unfortunately, the sports retailers in Finland wanted Virén to personally present every new spring collection, which would have involved driving thousands of miles around the country. So in the early 80s, Virén sold the company. “That was a mistake,” he says, laughing.

After the European Championships in Rome in 1974, some of Onitsuka Tiger’s designers interviewed Virén for insight on how they could improve the quality and fit of their shoes. “It was interesting for me to play an active role in increasing the performance of their running shoes,” says Virén. “I think it could still be the same - it should be. Running shoes today are not as good as they were back then. There are three or four things I would immediately change on the shoes today.”

Virén’s words astound me. How can today’s running shoes possibly be worse than those 30 years ago - with their hard leather, thin rubber soles and slippery grip?

Virén laughs at my reaction then heads to the medals room to fetch an original MONTREAL 76 trainer. On his way back, he picks up a new ASICS shoe from the lobby. He places the two shoes before me triumphantly. “In Finland, we have cold winters. In Great Britain, there is a lot of rain. A problem: if you get wet, you get cold. They should use different kind of materials on the shoes,” he says. “In the 70s, it was rubber - good for running on the snow. Nowadays, it is plastics and other artificial material, which is hard to run on. If it is minus ten degrees, you cannot use the running shoe anymore. The temperature makes the material hard.”

Virén’s son Matti, an athlete who is hoping to compete in the 2012 London Olympics, opens a box containing a brand new pair of old school Onitsuka Tigers. Virén looks at them, grins, and says, “I have those too.” He then walks into another room and returns with a vintage model of the pair Matti is holding. Except the toes of the shoes have been cut off, like sandals. “Why did you cut all those openings in the shoe?,” I ask. “It was too small,” laughs Virén. “I wear them in the summer.”

“I want to be on the athletes’ side.”

Virén’s relationship with Kihachiro Onitsuka began as a professional one, but the pair later became close friends. They shared an interest in sports and a love for running. In 1983 and 1994, Onitsuka visited Virén in Myrskylä, and in 2005, he returned with a delegation of 20 top level managers from ASICS Corp. “All the people from ASICS in Japan I know, I have known for a long

time,” says Virén. “So with them, it is more like a friendship.”

The bond may have been strengthened by the strong roots common to both the Finnish and the Japanese. “I have many good memories,” says Virén. “In 1983, when Mr. Onitsuka visited me, he was in a good physical shape. We went to some restaurant in Helsinki; everybody there was singing their national anthems. Franco Arese was there too (European Champion 1500 meters in Helsinki, currently country manager for ASICS in Italy). Mr. Onitsuka took his tie away and put the tie on his head as a samurai bandage and started singing the Japanese national anthem. The owner of the restaurant did not like it, so he came and warned us: ‘If you do not stop singing and cut the volume down, we will throw you out of the restaurant.’ The whole company, bearing many nationalities, was thrown out of the restaurant within minutes. A spontaneous moment, a good memory.”

On his last visit to Myrskylä in 2005, Kihachiro Onitsuka was less robust. “But overall, he still felt well,” remembers Virén. It would be their last happy moment together. Two years later, Onitsuka died of heart failure. Virén travelled to Japan to pay homage to him at a remembrance ceremony. “It was an impressive moment. Totally new for me,” says Virén. “I had never been in such a ceremony, with that many people. And I had never seen what his living situation was in Japan.”

Virén shows me a photo of him and Onitsuka smiling. That was the good times. In another photo, Virén is dressed in a black suit, his body bowed in a final goodbye to his dear friend.

This year, Onitsuka Tiger celebrates its 60th anniversary. Lasse Virén marked his 60th birthday too. “It is going downward with me from now,” he says. “It is good for the company that it is 60 years old, but for me it is not.”

Virén may have turned 60, but he hasn’t lost his urge to win, to be the best he can be. I ask him why he has never been invited to become a member of the Finnish Olympic Committee or the Finnish Athletics Association. “I do not want to be a boss; I want to be on the athletes’ side,” says Virén, smiling. As a coach? “Why not? Maybe!”

Virén’s son Matti, a top-two runner in the Finnish 800-meters, hopes to keep the family name alive by competing in the London Olympic Games in 2012. He says he will probably run the 1500-meter as well as the 3k. But his first objective is to beat his father’s 1500-meter record. “I will,” says the younger Virén confidently. We do not doubt it for a moment. ●

ツバ選手権で、オニツカタイガーのデザイナー達は、クオリティーやフィット感を向上させる方法について、ビレンの意見を聞きに来た。「ランニングシューズのパフォーマンスを上げるために彼らに協力することは、とても楽しかった」と、ビレンは言う。「今も当時のままだと思えますよ。そのはずです。でも、現在のランニングシューズは当時より悪くなっている。すぐに改善できる点が、3つか4つはあるね。」

彼の言葉に驚いた。なぜ今日のランニングシューズが30年前のものより悪くなっているのか。皮が堅いし、薄いゴムのソールでグリップもすべりやすい。ビレンは私の反応に

笑って、メダルルームにMONTREAL 76のオリジナルを取りに行き、帰りにロビーから新しいASICSのシューズを持ってきた。彼は私の前に2足の靴を誇らしげに置いて、「フィンランドの冬は寒い。イギリスは雨が多い。問題は、もし濡れてしまったとき、体が冷えてしまう。彼らは靴に違った素材を使用しなければならいんです」と彼は言う。「70年代はゴム素材で、雪の上を走るのには適していた。現在はプラスチックや他の人工素材なので、走るのには堅い。マイナス10℃以下になると素材が堅くなってしまってランニングには使えないんです。」

ビレンの息子Mattiは、2012年のロンドンオリンピックへの出場を期待されている。Mattiが新品のオニツカタイガー復刻版が入っている箱を開けると、ビレンは目を丸くして「私もこれを持っているよ」と、ニヤツと笑った。彼は別の部屋から、息子の持っているものと同じ靴のヴィンテージモデルを一足もって戻った。つま先以外が切り取られており、まるでサンダルのようなのである。「どうして靴に穴をあけてしまったんですか？」ときくと「私には小さすぎたし、夏だったんでね」と、彼は笑った。

「私は競技者でいたい」

ビレンと鬼塚喜八郎の交友関係は、プロフェッショナルなものから始まったが、後年は親密な友人同士となった。彼らはスポーツへの興味とランニングへの愛を分かち合った。1983年と1994年に、鬼塚はムルスキュラ にビレンを訪ね、2005年にはASICSを代表する20名のトップマネージャーとともに彼を再訪した。「日本のASICSの人たちとはとても長い付き合いで、彼らとは友達のような関係なんですよ。」

フィンランド人と日本人に共通するつながりによって、絆は深まっていった。「たくさんいい思い出があります」と、ビレンは言う。「1983年に鬼塚さんが私を

訪ねてきた時、とても調子が良さそうでした。私たちはヘルシンキのレストランに行ったんですが、そこではみんな一緒に国家を歌っていました。鬼塚さんはネクタイをはずし、それをサムライのように頭に巻いて、日本国家を歌いでしたんです。レストランのオーナーはそれが気に入らなかったらしく、「もしその歌を止めずボリュームも下げないなら、ここから放り出すぞ」と注意されてしまったんです。外国人がたくさん含まれている私たちのグループは、1分もかからないうちに店から追い出されてしまったんですよ。自然に沸き起こった出来事でした。いい思い出です。」

2005年に最後にムルスキュラを訪問した時、鬼塚喜八郎はすこし元気がなかった。「でも最後まで、鬼塚さんは楽しそうでした」と、ビレンは言う。それは彼らにとって、最後の幸せなひとときだった。2年後、鬼塚は心臓病で他界する。ビレンは日本を訪れ、追悼式で敬意を表した。「私にとって印象的で、まったく新鮮な時間でした。あんなにたくさんの方が集まる式に参列したことがなかったし、彼が日本でどうやって生きていたのかを全く知らなかったから。」

ビレンが鬼塚と一緒に微笑んでいる、良き時代の写真を見せてくれた。もう一枚の写真では、彼は黒いスーツを着て、親愛なる友に対して最後の別れのお辞儀をしている。

今年はおニツカタイガー誕生60周年であり、ラッセ・ビレンも60歳を迎える。「私はこれから下り坂だ」と、彼は言う。「会社にとって60周年は素晴らしいが、私にとってはそうでもないよ。」

60歳を過ぎてビレンは勝利への情熱、ベストを尽くすことへの情熱をいまだ失っていない。フィンランドのオリンピック委員会や陸上協会のメンバーとして何故彼が選ばれないのかを尋ねると、「私はボスにはなりたくない。競技者の側でいたんだ」と微笑んだ。コーチはどうか？と聞くと、ビレンは笑いながらこう言った。「もちろん。そんなことがあれば是非！」

息子のMattiは800mのトップランナーだが、2012年のロンドンオリンピックでファミリーネームをよみがえらせることを望んでいる。3kmだけでなく、おそらく1500mのレースにも出場する予定だという。彼の一番の野望は、父親の1500mの記録を塗り替えることである。「必ずやってみせます」。若きビレンは自信に満ちて語った。現時点で疑う余地はない。●

8

Made of Japan - ナイト・オフ・ジヤパン

9

Made of Japan - ナイト・オフ・ジヤパン

